

日本貿易会賞懸賞論文募集10周年を迎えて — 過去9年間の軌跡 —

一般社団法人日本貿易会
広報グループ

1. グローバルなイベントに成長した日本貿易会賞懸賞論文

日本貿易会は、当会の活動、商社への関心を高める施策の1つとして、2005年から国内外より広く論文を募集する日本貿易会賞懸賞論文事業を行っています。2005年の第1回から2013年の第9回までの受付点数は、累計で約1,400点に上ります。あらためまして、ご応募いただいた皆さまに感謝申し上げます。

図に示した通り、第1回の応募受付数は134点でしたが、その後、次第に応募受付数が増加し、8回目（2012年）には過去最高の216点にまで増加しました。

応募者の年齢層を見ると、10代の中・高校生から80代前後の方まで、幅広い層から関心を寄せていただきました。また、応募者の国籍も、日本国内はもとより、アジア、中東、欧州、米州、そして近年はアフリカからの応募者が増加しており、毎年のようにチャレンジされる方も見受けられます。このように本懸賞論文事業は、グローバルなイベントへと大きく成長しました。

2. 国内外の動向を踏まえた募集テーマの選定

例年、春に開催する懸賞論文審査委員会では新たな募集テーマ設定のため、さまざまな議論を行います。日本国内の応募者だけではなく、海外の応募者にとっても関心と理解を頂けるテーマが求められるため、議論が長時間に及ぶことも少なくありません。表1に示す通り、初期には、商社の事業活動にも関わるグローバルな事象に基づくテーマを選定することが多く、その後は、長年にわたる日本経済の停滞の処方箋や日本の社会への提言を求めるようなテーマ、リーマン・ショックに端を発する世界金融危機以降の資本主義の在り方に関するテーマ、また、2011年には、震災復興に対する提言を求めるテーマなど、国内外の情勢を反映させたテーマが選ばれてきました。

3. 記念すべき10回目となる懸賞論文を募集中！

今年も、6月16日に第10回日本貿易会賞懸賞論文の募集を始めました。今年は「商社」と「資源」をキーワードに、2テーマを掲げました。日本、そして商社ビジネスの将来を考える機会として、本懸賞論文への多数のご応募をお待ち申し上げます。

募集の詳細は懸賞論文サイトで公開中

www.jftc.or.jp/discourse/

2014年度募集テーマ：

<下記テーマのうち1つをお選びください。審査は、募集テーマにかかわらず、一律に行います。>

テーマ① グローバル経済における“商社”のあり方

テーマ② 2020年の日本が持つ“資源”と世界の発展に果たす役割

賞 金：日本貿易会賞 大 賞 100万円 1点

優秀賞 20万円 3点をめどに選定

言 語：日本語（10,000字以内）もしくは英語（4,000words以内）

応募資格：不 問（年齢・国籍等を問いません）

締め切り：2014年9月12日（金）日本時間24：00

審査委員長：中島厚志 独立行政法人 経済産業研究所 理事長

審査副委員長：安部順一（株）中央公論新社 取締役雑誌編集主幹 兼 中央公論編集長

伊藤恵子 専修大学経済学部 教授

問い合わせ先：広報グループ Tel：03-3435-5964 E-mail：kouhou@jftc.or.jp

図 これまでの応募者数の推移

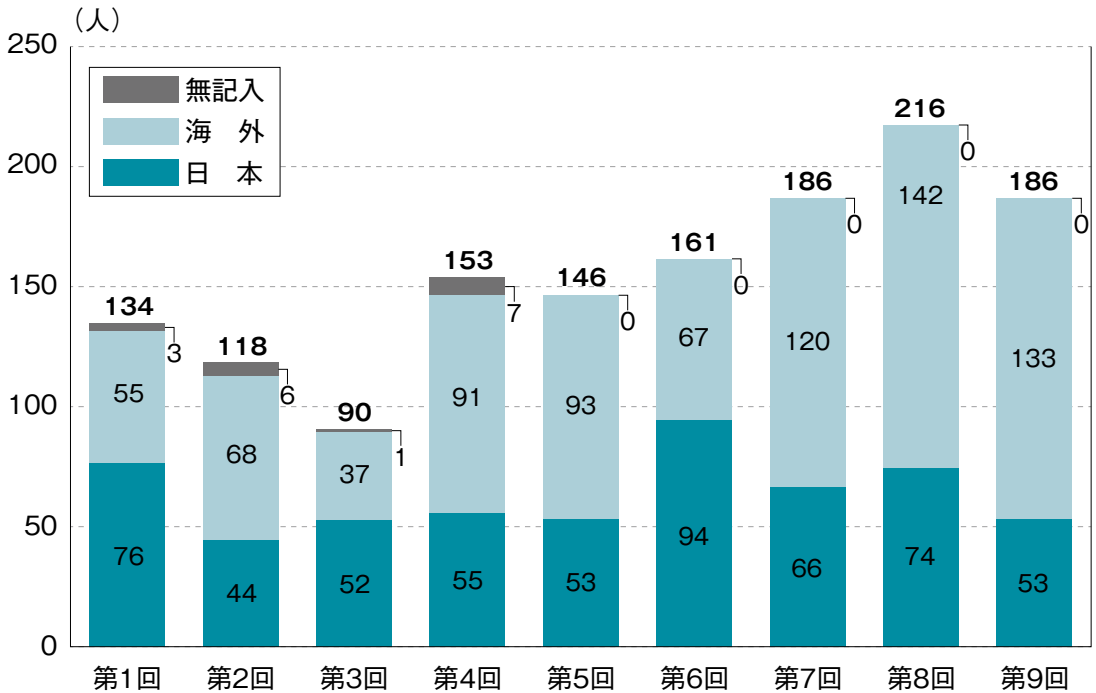


表1 第1回～9回までの懸賞論文募集テーマ

	募集テーマ
第1回 (2005年)	グローバリゼーションと日本企業
第2回 (2006年)	ジャパン・ブランドの可能性
第3回 (2007年)	グローバル資本主義と日本企業
第4回 (2008年)	地球を救う『日本型』ビジネスモデルとは
第5回 (2009年)	グローバル資本主義をどう修正すべきか ～日本の役割と使命～
第6回 (2010年)	日本再立国論～縮小日本脱出の処方箋～
第7回 (2011年)	3.11後の“新生日本”のビジョン
第8回 (2012年)	人口減少社会・日本への処方箋
第9回 (2013年)	グローバル経済における日本の針路 - 新たな成長のための戦略と世界への貢献 -

表2 過去の懸賞論文受賞者

回	賞	入賞者氏名	論文タイトル	国籍	言語
1	大賞	田村 暁彦	『コーポレート・フォーリン・ポリシー』の勤め	日本	日
1	優秀賞	ラウマ・スクルズマネ	"Globalization's new face -Corporate Social Responsibility"	ラトビア	英
1	優秀賞	依田 慎	日本企業に求められてきている異文化マネジメント力	日本	日
1	優秀賞	稲澤 定	地方企業のグローバリゼーションーその具体的事例と方向性についてー	日本	日
2	大賞	エリック・マグナス・ハウアン	The Potential of Brand Japan	ノルウェー	英
2	優秀賞	杉山 大輔	守破離	日本	日
2	優秀賞	菅野 良巳	ジャパン・ブランドの根底にあるものー継承と変容の伝統とその将来ー	日本	日
2	優秀賞	佐藤 秀樹	日本ブランドの奥行き	日本	日
3	優秀賞	Heng Dyna	The Win-win-win Globalization and Japanese Companies	カンボジア	英
3	優秀賞	黄 品全	Gundammomics : Transforming Corporate Japan for the Challenges of Global Capitalism	シンガポール	英
3	優秀賞	Séphora Volcy	Responding to Global Capitalism : Today's Priority on Japan's Business Agenda	フランス	英
3	優秀賞	神谷 渉	日本企業への提言ー緊張感のある企業への変革を	日本	日
4	優秀賞	Kamila Pieczara	Reinforcing the Japanese Brand as Environmental Leader : The Role for Corporations	ポーランド	英
4	優秀賞	王 駿耀	Anatomy of Japanese Business Leading to Sustainable Growth	中国	英
4	優秀賞	Ananya Mukhopadhyay	Japanese Environmental and Energy Services - The Dark Horse	インド	英
4	優秀賞	安部 直樹	『微分型経営』から『積分型経営』へー3つのパラダイム転換ー	日本	日
4	審査委員長特別賞	Shellen Halim	Japan's Green Technology for Earth and Economy	インドネシア	英
5	大賞	三浦 清志	グローバル資本主義の修正と日本の使命ー経済危機がもたらす二つの危機の克服に向けて	日本	日
5	優秀賞	茂木 創	グローバル資本主義への処方箋ー経済騎士道は日本より甦るか	日本	日
5	優秀賞	Michal Olewnik	Restoring Stakeholder Trust - Lessons from Japan's Consensus Capitalism	ポーランド	英
6	大賞	大庭 弘継	世界を変えて、日本を変える：アントレプレナー国家を目指して	日本	日
6	優秀賞	Samuel Guiberteau	Reconstruction of Japan : prescription to transcend a downsized Japan	フランス	英
6	優秀賞	Yu Noda	A smaller, but happier country with increased mobility	日本	英
6	優秀賞	Phetkeo Poumanyong	Internal Reforms as a Prescription to the Revival and Reconstruction of Japan	ラオス	英
6	審査委員長特別賞	Ramesh Krishnan	RECONSTRUCTION OF JAPAN : PRESCRIPTION TO TRANSCEND A DOWNSIZED JAPAN	インド	英
7	大賞	Nicole Brown	Japan v 3.11- Reclaiming the Date	ジャマイカ	英
7	優秀賞	Chiden Balmes	The Making of New Innovative Japan : Road Map to Great Recovery	フィリピン	英
8	大賞	Michael Sullivan	"Strategies for a Depopulating Japan" A British Model and a Japanese Legacy	英国	英
8	優秀賞	Kadri Metspalu	Strategies for a Depopulating Japan - Towards a More Inclusive and Happier Japan	エストニア	英
8	優秀賞	Anil Nirody	Japan's Declining Population : A Comprehensive Approach to Reversing the Trend	米国	英
8	優秀賞	浅野 孝志	カバーリングとシェア型社会の構築	日本	日
9	優秀賞	水沼 徹夫	Is it possible to replicate Silicon Valley in Japan?	日本	英
9	優秀賞	Yam Huo Ow	Japan as a Revitalised Hub: Industries, Policies and Capacity Building Issues	シンガポール	英
9	優秀賞	泉 隆一郎	TWO INNOVATIONS - 2つのイノベーションが融合するときー	日本	日
9	審査委員長特別賞	Soo Teng Yong	Reclaiming Japan - Japan as a Cultural Mecca	マレーシア	英

グローバル化時代を「考える」契機 — 日本貿易会賞受賞に思う

拓殖大学 政経学部
准教授

もてぎ はじめ
茂木 創

(第5回日本貿易会賞懸賞論文 優秀賞受賞)



まばゆい光を放ちながら到来した「グローバル化」は、その輝きが強ければ強いほどより大きな影をもたらす。未曾有の金融危機を通じ、われわれ人類はそれをあらためて思い知らされたのである。

第5回日本貿易会賞は、まさに国際金融危機に世界が揺れるただ中、「グローバル資本主義をどう修正すべきか～日本の役割と使命～」というテーマで公募された。時宜を得たそのテーマに、経済学者として日々感じていた資本主義の矛盾や、経済哲学の重要性を訴えようと筆を執った。

拙稿「グローバル資本主義への処方箋－経済騎士道は日本より甦るか」では、歴史を振り返り、起業の難しかった戦前の企業家たちが、誇りを持って奉職し、雇用者のみならずその家族や地域社会、ひいては日本の国益に対しても責任を持っていた事例を挙げ、逆説的ではあるが、戦前の社会的特徴である「貧富の格差」が是正されたことによって、今日かえって企業家の公共的精神が失われていったという仮説を展開した。そして、グローバル資本主義を修正するための処方箋として、A.マーシャルの「経済騎士道」や、渋沢栄一の「士魂商才」などに見られる公共的精神の重要性を指摘し、経済主体の「意識改革」こそが、グローバル資本主義修復のカギとなると主張した。

戦前の社会にもろ手を挙げて賛同するつもりはない。しかし今日、マネー・ゲームに血道を上げる一部の利殖家の、その実態なき経済活動の帰結が生み出す混乱の真因

を「公共的精神の希薄化」と看破した点について、査読に関わられた方々の賛同を得られたとすれば、私の執筆の目的は達成されたといえるだろう。挑戦的な試みであったが、多数の応募作品の中から選ばれたことの意味を考えると、面はゆくも文責の重さを痛感している。

もちろん、今にして読み返すと、行間にあふれる熱い思いに気恥ずかしさもある。「若気の至り」といえばそれまでだが、執筆を通じ、経済学者として「冷静な頭脳」だけでなく「温かい心」を持つことの大切さを実感できたことは、その後の私にとって貴重な経験となった。

受賞後、私は大学にて「食料・燃料・金融の相互関連メカニズムの解明」をテーマに掲げ、日々研究を続けている。グローバル経済において、三脚巴のように複雑に絡み合う経済事象が私の対峙する課題であり、難問である。しかし、この難問に立ち向かう勇気を与えてくれたのも、受賞およびその後の日本貿易会との関わりがあつてのことである。日本貿易会の天野正義氏（専務理事）とは、その後『通商白書』のヒアリングを通じ、「グローバル化の中の日本の針路」について話をする事ができたが、こうした経験も、課題に立ち向かう一押しとなったことは疑いない。

グローバル化時代の繁栄と、それと隣り合わせのリスクについて「考える」契機を与えてくれた日本貿易会。謹んで感謝申し上げ、今後の活動に微力ながら尽力できればと考えている。

日本貿易会賞懸賞論文 10周年記念座談会

—過去9年間の経緯と10回目の募集に対する期待—



【出席者（敬称略、順不同）】

- | | | |
|---------------------|------------|---|
| 中島 厚志 | (なかじま あつし) | 日本貿易会賞懸賞論文審査委員会 審査委員長
(独立行政法人 経済産業研究所 理事長) |
| 安部 順一 | (あべ じゅんいち) | 日本貿易会賞懸賞論文審査委員会 審査副委員長
(株)中央公論新社 取締役雑誌編集主幹 兼 中央公論編集長 |
| 伊藤 恵子 | (いとう けいこ) | 日本貿易会賞懸賞論文審査委員会 審査副委員長
(専修大学経済学部 教授) |
| 荻野 文夫 | (おぎの ふみお) | 三菱商事(株)グローバル渉外部 渉外企画担当部長 |
| 天野 正義 | (あまの まさよし) | 日本貿易会 専務理事 |
| (司会)
木村 昭 | (きむら あきら) | 日本貿易会 広報グループ部長 |

1. 過去9回の懸賞論文募集を振り返って

木村 (司会) 本日は過去9年間の日本貿易会賞懸賞論文を振り返りつつ、10回目となる本年の募集に対する期待について伺っていききたい。過去9回の懸賞論文を振り返ると、当初は「グローバル化が進展する中で日本企業が成長を遂げるために何が必要か」という切り口の募集テーマが多かったが、その後、日本の低成長、デフレが続く中で、「日本をどう変えるべきか」という視点も加味され、マクロ経済の視点からの募集テーマが増えた。また、東日本大震災が発生した年には、「震災から日本がどのように復興すべきか」というテーマも選定された。

最初に、日本貿易会の天野専務理事から懸賞論文の経緯を、また過去9回のうち7回にわたり審査委員をお務めいただいた荻野さんから、この懸賞論文事業に対する感想をお伺いしたい。

天野 (日本貿易会) この懸賞論文事業は、2005年に当時の日本貿易会 佐々木会長（現 三菱商事(株)相談役）の下で、当会活動をさらに国内外にPRするために企画立案されたものである。佐々木会長の会長就任時に「グローバル・フロンティア」を当会のキャッチフレーズとして掲げたため、「グローバル・フロンティア賞」という名称も検討されたが、日本貿易会主催の懸賞論文であるということで、最終的には「日本貿易会賞」という名前に落ち着いた経緯がある。

第1回から第8回の審査委員長、副委員長には、中谷巖先生、和気洋子先生、森 一夫様に、昨年度の9回目からは、本日、ご出席いただいている中島審査委員長、安部副委員長、伊藤副委員長にお願いしている。こ

うして10周年を迎えることができたのも、歴代の正副審査委員長をはじめとして、会員企業各社、さらに現在の審査委員長、副委員長等々のご指導、ご支援のたまものであり、この場を借りてあらためて御礼を申し上げる次第である。

毎回、懸賞論文の募集に当たって最大の課題となるのが募集テーマの選定である。この懸賞論文は、第1回から国籍不問、年齢不問、職業不問として、どなたでも応募できるイベントと位置付けているが、国内からだけではなく、海外からも応募いただけるテーマとすることが前提となる。募集テーマ選定ではいつも大議論になるが、今回も無事にテーマを決めることができたところである。

荻野 (三菱商事) 第1回の募集の時に一番覚えているのは、「賞を立ち上げたのはいいが、応募が本当に集まるだろうか」ということで、審査委員一同、大変心配したことである。事務局から「海外からも応募が来ていますよ」という話を聞き、また、受付点数が100点を超えたと聞いた時には、「100点を超える応募があれば、懸賞論文事業としてそれなりの形になるのではないか」という思いで、胸をなでおろしたのを覚えている。

現在もこの傾向が続いているようであるが、海外の関心が高いことに初回から非常に驚いた。アジア諸国をはじめとして、欧州、アフリカ、中南米、米国と、世界中から応募があり、商社あるいは日本貿易会という名前を知っていただく上で大きな貢献ができるイベントになると感じた。

また、特に海外の作品には、「日本が大好き」というメッセージを熱烈に訴える内容が多く、「これほど日本ファンが多いのか」とあらためて感じたものである。その視点はさまざまで、アニメ、日本の食品、中には日本

のお菓子が大好きというアジアの方からの応募もあり、毎回、何通かこうした趣旨のメッセージを訴えている作品があったことが非常に印象的である。

審査委員を務めていた時は、日本がデフレからなかなか脱却できない状況にあり、その後、東日本大震災が発生して、国内では閉塞感へいそくが非常に強くなった。そういう厳しい状況の中で、「日本が大好き」という人が海外に多数いたこと、特に震災後は、「日本の再生、復興に疑いを持っていません」といった応援メッセージの込められた作品には、非常に励ましを頂いたことを覚えている。

2. 昨年度の論文審査を経験して

木村 (司会) 続いて、昨年度から審査をお願いしている中島審査委員長、安部副委員長、伊藤副委員長に、初めて審査されたご感想をお伺いしたい。

中島 (審査委員長) 私は以前に、同様の審査を何回も行ったことがあるが、それは国内中心のイベントであった。これほど多数の海外からの作品を、それも幅広い年齢層の方々が書かれた作品を読む機会は初めてで、荻野さんのお話にもあったように、大変に刺激を受けた。昨年度の審査の経験に限られるが、最終審査に残った論文はいずれも甲乙付け難い内容で、その中で賞を選出するというのは大変であった。

先ほどもお話があったように、毎年のテーマ設定には時流、世相が反映されている。その中で、この懸賞論文には、大きくは日本のグローバル化への取り組み、あるいはその中で企業の活動の在り方が示されている。また、日本の経済状況を映した中で、どのように国として対応していくべきなのかといった大きな社会的、経済的な課題がよく表れている。

さらに、この懸賞論文は年齢、国籍、職業不問であることから、幅広く受け入れられるテーマでありながら、一方で見識があるテーマが求められ、過去9回のテーマをあらためて見直すと、日本貿易会らしい懸賞論文の募集テーマが選ばれてきたという印象を受けている。

安部 (副委員長) 海外の方がどのように日本を見ているのかということは、実は分かっているようで分からない部分がかなりある。メディアの世界にいる者としては、「なるほど、こういう物の見方をされているのか」ということを大変意識することができたのが日本貿易会賞だった。また、日本の応募者の方々も同じテーマで論文を書いているため、逆に「日本の人たちの見方はなるほどこうなのか」という違いも分かる。今年で10回目を迎えるこの懸賞論文は、ホームページ上に大賞・優秀賞の作品が掲載されているため、読んでいただければ、世界の中での日本の立ち位置を意識できるのではないかと思う。

伊藤 (副委員長) 私も海外から多数の応募があったことを大変うれしく感じた。日本の学生でも、政府が発刊している「白書」を読む学生はそれほど多くはないと思うが、そのような文献にも目を通して、日本政府の成長戦略について勉強している学生や若い人たちが世界に数多くいることを心強く感じた。日本から



株式会社中央公論新社
取締役雑誌編集主幹
兼 中央公論編集長

安部 順一 氏



独立行政法人経済産業研究所
理事長
中島 厚志 氏

見て非常に遠くにいる方が、日本の成長戦略に関して勉強し、一生懸命、書いてきてくれたということが印象深い。また日本の方は、「何々の課題がある」という姿勢で書くのが好みかもしれないが、外

国の方は、テーマに対して、前向きなスタンスで書かれている印象を受ける。大学でも学生に懸賞論文への応募を勧めているが、何か難解なものを書かないといけないように考える学生が多い。審査で目を通した個々の論文は、気負って難解なものを書かれたというより、自分なりに調べて、一生懸命書かれた作品という印象である。そういう意味では、普段の勉強の中で、思い、感じたところから、気軽な気持ちでまずは書いてみるという姿勢があればよいのではないか。

木村 (司会) 海外からの応募が多いことを裏返して言えば、日本の方、特に学生からの応募が少なく、また、学生が入賞しないということが事務局としては長年の悩みであった。この点についてもご意見、コメントをお願いしたい。

天野 (日本貿易会) この懸賞論文事業を始めた時には、実は、若い人からの積極的な応募があるのではないかと期待していた。実際は、中堅ビジネスマンや、ご高齢の方からの応募が比較的多く、それはそれでうれしいことではあるが、やはり日本の将来を担う学生さんからの応募が、もっと増えてほしいという思

いはある。事務局としては、日本全国の大学にポスターやチラシを配り、新聞広告を出す、さらにはウェブにも広告を打つなど、積極的にプロモーションを掛けているが、学生については、海外からの方が日本人学生よりも多く応募しているのが実情である。

2013年度からは、日本在住の入賞者の方への特典として、海外の商社事務所訪問の機会を提供しているが、2013年度の入賞者の泉隆一朗さん(当時 慶應義塾大学4年)は、この特典を利用してミャンマーを訪問し、見聞を広めていただいた。商社への関心の有無にかかわらず、泉さんに続いて、学生諸氏に奮ってチャレンジしていただきたい。

荻野 (三菱商事) 審査委員を務めていた時にも、結果として日本の学生さんの入賞者が出なかったことは話題になったが、今、伊藤先生からお話を伺って、「学生さんにしてみると敷居がちょっと高かったのかな」ということも感じる。昨年は国内の学生さんが初めて入賞し、今年もぜひ、夏休みに少し時間をつくって、あまり勢い込まずに、日本の学生さんが多く応募してくれることを期待したい。

3. 最近の日本の経済環境、世界の中の日本、商社の役割

木村 (司会) 中島委員長から、懸賞論文の募集テーマが時流にふさわしいものが選ばれる傾向があるというお話があったが、今年度の募集テーマを検討するに当たり、どのように経済環境を認識され、日本の状況をご覧になっているかお話を頂きたい。

中島 (審査委員長) 現在は「アベノミクス」が進む中で、日本経済がようやく息を吹き返してきたという状況だと思う。ただ、アベノミクスの第3の矢、成長戦略の成果が問われ

おり、いつまでも政府主導だけで経済成長することはできないため、いかにして民間部門が活力を回復していくかということが大事な局面にある。その点では、日本の規制緩和がどこまで進むのか、そして経済の構造的な活性化がどこまで進むのかが問われる状況になっている。

例えば日本の対内直接投資は他の先進諸国ばかりではなく、全世界と比べてもGDP比で見ると最下位水準にある。内外で企業がいかに活躍できるかという意味での規制緩和、これが成長戦略の試金石になる。対内直接投資が広がるということも規制緩和の指標の1つになるのではないかと思う。

また、TPP交渉に日本が参加している背景には、企業活動がグローバル化して、各国間の貿易、投資における障壁の除去が不可欠になってきたという側面がある。企業のグローバル・バリュー・チェーン構築がますます重要になり、グローバルな流通システムが経済の安定化に欠かせないという状況において、商社機能の役割が従来にも増して重要になっているのではないか、あるいは再評価されるべき状況にきているのではないかという印象がある。

安部 (副委員長) 中島委員長が言われたことに加えて考えていかなければいけないのは、国際政治についてだ。例えば、最近の話題でいえば、タイでのクーデターや、ウクライナの情勢、日中間の政治問題など、こうした政治的な諸問題がいまや経済とは不分離の状態となっており、アベノミクスがうまくいくかどうかは、国内もさることながら、国際的な観点から見た情報が重要になってくる。

こうした国際的な情報収集という意味では、商社の情報網は貴重で、これからの商社の役割は大きいと思う。こういう懸賞論文をやり

ながら、いろいろなところに日本の商社の存在が認知されていくということは、ある意味、非常に重要なことであると思う。ビジネスは常に情報戦であり、今後、ますます重要になる。日本政府の情報戦略への関心が高まっているが、アベノミクスを成功させるためにも、その情報戦を強化していかなければならない。

伊藤 (副委員長) 最近いくつかの国際会議に出席したところ、日本の長期成長に関して、2020年以降の予測値がかなり悲観的な数値となっていた。今回の懸賞論文の募集テーマの1つは、2020年までに日本が“資源”をどのように活用していくかであるが、日本に残された時間はあまりなく、将来を見据えて2020年までに何をやるかということが非常に重要なイシューであると思っている。日本からも、特に若い方が、これから2020年までに日本が何をすべきかを真剣に考えて、いろいろな意見を出してほしい。

また、グローバリゼーションが進む一方で、ナショナリズム台頭の傾向も見られるが、こうした論文の執筆を通じて、自分の知らない国のことを地道に勉強することが、国際摩擦や政治的な危機を緩和するのにも役立つと思う。多くの方の国際関係の改善に向けた意識が高まっていくことにも期待したい。



三菱商事株式会社
グローバル渉外部
渉外企画担当部長
荻野 文夫 氏



専修大学
経済学部 教授
伊藤 恵子 氏

というのは、ますます拡大しているのではないか。商社ビジネス自体が国際的な関係を円滑にし、また互恵的な関係を取り持つ役割を担うという意味で、今後、ますます重要性が増すのではないかと考えている。

荻野 (三菱商事) 「変化の中にこそビジネスチャンスがある」ということは、しばしば言われることではあるが、商社のビジネスモデルは、川上から川下にかけてのバリューチェーンの最適化を図ることにより、サプライヤー、ユーザーであるお客さまに貢献していくことにある。時代の環境変化に応じて、新しいバリューチェーンを築き、既存のバリューチェーンの効率を高め、強化することが仕事である。

そういう意味では、今、時代の変化がますます速くなっている。シェールガス革命によって世界経済の枠組みは大きく変わるかもしれないし、国際社会の地政学的な様相も一変させるかもしれない。日本も、TPPに向けて大きく変わるかもしれない。

これまでも時代の変化に応じて事業領域や機能を変革し、新たなビジネスモデルを生み出してきた商社という存在が、社会や世界に貢献する余地はますます拡大してくることを

天野 (日本貿易会)

日本貿易会も、いま中島委員長、安部副委員長が言われたことに関心を持ちながら、さまざまな提言、調査研究活動を進めているが、グローバル化の動きの中で商社が活躍できる場と

信じているし、それを実現しなければならない。この懸賞論文を通じて、日本について、あるいは商社について興味を持たれた方々と、いろいろな場で一緒にビジネスに携わる機会ができることを期待している。

4. 第10回日本貿易会賞論文募集に対する期待

木村 (司会) 今年の懸賞論文の募集テーマが決まった。1つは「グローバル経済における“商社”のあり方」という“商社”論、もう1つが「2020年の日本が持つ“資源”と世界の発展に果たす役割」という広義の“資源”論である。この募集テーマを踏まえ、日本経済、日本企業が向かうべき方向性ということで、委員長、副委員長の皆様方からコメントを頂きたい。

中島 (審査委員長) まず2020年は日本にとっては、1つの区切りになる。そこに向かっていろいろなチャレンジが必要である状況が見えている。先ほど、「日本人は課題を見え、海外の方は前向きに捉える」というお話もあったが、そのチャレンジを大変なこととして捉えず、日本が持つ知恵、ノウハウなどチャレンジをこなしていくだけの力もあることを踏まえ、日本の良さをどのように活用しながら、良い形でチャレンジを果たしていくか、今年のテーマには、そういう問題意識が含まれていると感じている。

安部副委員長からも日本経済をグローバルに捉えていくことが必要というお話があったが、この懸賞論文は海外からの応募が多いため、日本をグローバルな視点で見つめ直し、その上で必要なアクションをいかに取ることができるのかを見る良い鏡でもある。

例えば日本企業を例にとると、海外と比べ

るよりも、国内の同業他社と比べて行動する傾向が強い。日本の商社が世界レベルでビジネス環境の変化に対応し、フレキシブルに業態を変えながら発展しているのは、グローバルな視点で物事を見ているという点がある。今、あらためて商社という存在を見直すと、そこに、日本のこれからの活躍を支えていく、あるいはそこから日本の活躍が見えてくる側面があるのではないかと思う。

今回は10周年ということで、特別にテーマを2つ選定したが、日本が抱えるチャレンジに対して、どのように乗り越えていかなければならないのか、その中で日本人、あるいは日本企業はどのようにグローバル化を意識し、それに対応していかなければならないのかという点で、どちらのテーマも重なる部分があると思う。幅広い、普段、われわれが意識していない視点からの考察を大いに期待しており、意欲的な提言が来るのを楽しみにしている。


安部 (副委員長) 2020年の日本というテーマについて言えば、例えば女性の活用、少子高齢化、人口減少にどう対応するのかという課題も見られる。日本は、世界の中でもこうした課題の、いわば先進国だ。2020年をターゲットにして物事をどのように変えるのかを考えるとともに、次の50年、100年をつくるための2020年と捉えたい。今回はそのための“資源”を、日本だけではなく世界の人々に考えていただきたい。今からどのような内容の論文が来るか、大変楽しみにしている。

伊藤 (副委員長) 募集テーマの“資源”という言葉には、人材も意識しているが、その意味では、教育は非常に鍵になる切り口であると思う。何を教育すべきか、どういう教育をすべきか、どういった教育システムにすべきかが、日本の人的資源の蓄積、強化、活用に

とって重要となる。

対内直接投資が少ないという議論も、問題の根幹の1つは教育ではないかと思うことがある。対内投資促進には、日本人の外国企業に対するイメージや働き方に対する意識の変革が重要だとの意見があるが、教育を通じた多文化理解の向上が個人の意識を変え、長期的に海外からの投資増加に貢献すると考える。しかし、現実には日本の大学の国際化はさまざまな面で不十分である。その上、海外の大学が日本で教育活動を行う場合には制約が多いため、日本ではなく、中国や東南アジアで欧米の大学がキャンパスを開設する状況にある。もちろん、懸賞論文の中では教育に限らず、いろいろな視点からの提言を頂きたいが、新しい考え方、アイデアを出していただきたい。

木村 (司会) それでは最後に天野専務より一言お願いしたい。

天野 (日本貿易会) 本日は「懸賞論文10周年記念」ということで、この懸賞論文事業の過去を振り返り、さらに昨年度から参加いただいている審査委員長他の皆さまから、日本経済をめぐる経済環境、日本の立ち位置、商社の役割等々も踏まえて、10回目となる懸賞論文募集に際して、どういうことを期待するかといったお話を頂いた。中島審査委員長、安部副委員長、伊藤副委員長には、本年度も審査においてお手数をおかけすることになるが、よろしくお願い申し上げる次第である。また本日は荻野さんからも懸賞論文事業の開始当初のお話をお伺いすることができ、また、これからの懸賞論文事業を考える上において、非常に参考になるご意見を頂いた。あらためてご出席いただいた皆さまにお礼を申し上げます。 

(2014年5月23日、日本貿易会会議室において開催)